

## 浦上八月踊り復興物語

—シマに根付いた踊りと歌と魂のつながり—

前山真吾

## Revitalization of the August-dance in Uragami

MAEYAMA Shingo

唄者

*Shimauta Singer*

### 要旨

奄美大島の名瀬北東部にある浦上集落は、近年八月踊りの復興が著しい地域として知られている。この地域の八月踊りがどのような組織形態によって、どのような機会に、どのような形で行われているのかを、実際に踊りの運営に携わった住人の視点から、将来の展望や課題も含めて具体的に報告した。

### 報告

皆さん、きゅうやうがみんしょうらん。こんにちは。ただいまご紹介に預かりました前山真吾と申します。ぼくはふだんは高齢者福祉関係の仕事をしておりまして、ある施設でお年寄りの方々の相談、ご家族の方々の相談を聞いたりする仕事を本職としております。そのかわら、地元の民謡である奄美の島唄を歌ったり、きょうお話をさせていただき地元の集落の浦上の伝統行事に参加したり、とそういった活動をしながら平凡な生活を送っている人間です。きょうは素晴らしい先輩方のお話をするとということで、大変に緊張しております。いきなりレベルが下がった話になりますが、皆さん、どうぞ肩の力を抜いて聞いてやってください。よろしくお願ひします。

まず、ぼくの報告のタイトルですけど、「浦上八月踊り復興物語」です。なんだかいまにもドラマが始まりそうな感じがしますよね。そういう非常に重たいテーマなのですが、ぼくがこれから話すことは、けっしてそれほど大それたことではありません。ぼく自身が日頃、浦上の青年団活動を通してふつうに向き合ってきた、青年団活動の中のひとつの伝統行事である八月踊りについて、自分の主観だったり考えだったり、価値観だったりを中心にお話させていただこうと思っています。まあ、皆さんにとっては賛否両論のことともたくさんあるとは思いますが、30歳の若造が何か言っているくらいに気持ちで聞いてやってください。よろしくお願ひします。

まず、私が住んでおります浦上町ですが、奄美市名瀬の北東部に位置しております。といっても分かりづらいですよ。簡単に言えば、名瀬の最北端にあるということになります。龍郷町の一步手前の本茶峠の一步手前にある集落です。人口は平成29年度10月現在で1898人です。一時期は二千人いくんじゃないかと言われたほどの人口増加が見られました。実は

この集落は、面積という点では大変に小さな集落なのですが、1898人という数字は、意外なことに大和村、宇検村の人口とほとんど変わらないんですよ。世帯数は865世帯あります。

町内会の組織としては、年代が上の組織から言うと、まず「若返り会」という会があります。昔は「老人クラブ」と呼ばれていたのですが、65歳以上の方が所属する団体です。その下に50代の方のみが所属する「五十代（いそよ）会」という団体があります。これはひょっとすると浦上独自のものかもしれません。その下に「婦人壮年団」という団体があります。実はぼくはいま青年団を卒業して、この「壮年団」におりまして、その一番下っ端の世代です。数えて35に当たる歳から壮年団に入ります。35歳から50歳未満のひと、婦人会が合わさって「婦人壮年団」ということになります。その次に「子供育成会」という組織があって、その下が33歳未満。高校生から33歳未満までの人が所属するのが「青年団」ということになります。大変に大きっぱですが、こういう組織で浦上は成り立っております。

あと、浦上の歴史的なシンボルの一つとしては、平家伝説にまつわる平有盛公が築いた有盛神社があります。これは奄美市の指定文化財にもなっている神社でございます。

さて、現在浦上で踊られている八月踊りなんですけれども、いま歌われている唄、踊りは14曲あります（図1）。

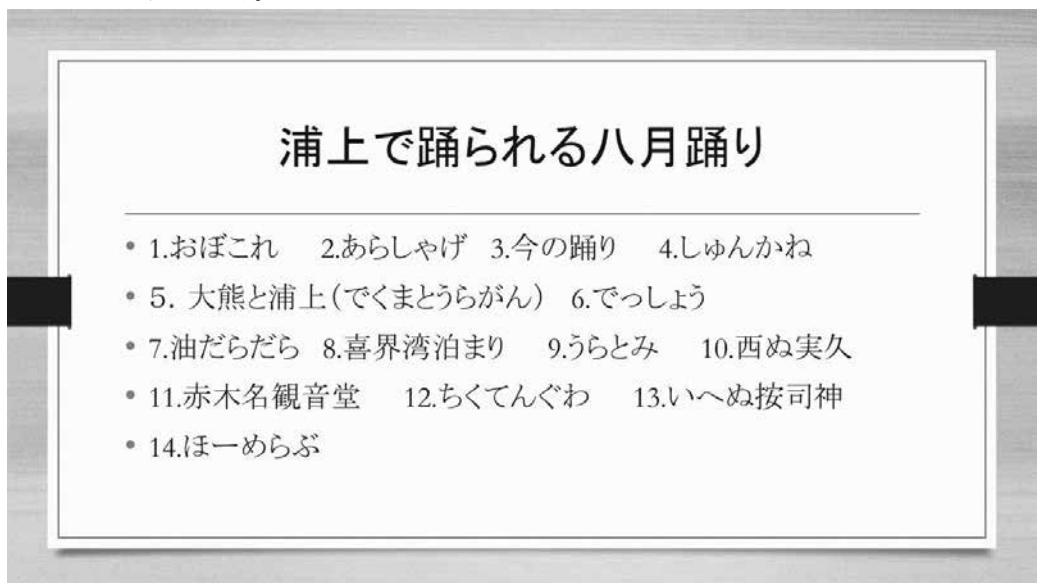


図1

「おぼこれ」「あらしやげ」「今の踊り」「しゅんかね」「大熊と浦上」、これは島口では「でくまとうらがん」といいますが、大熊は浦上の隣にある集落で、カツオの一本釣りで有名な集落です。これはどこの集落にもあるとことだと思わんですが、大熊と浦上は島で俗に言う「いんとまや」（犬と猫）。たとえば運動会とか、何か競い合う場があるときは、ウラガンチュ、これは浦上の人ってことですが、ウラガンチュは「大熊にだけは負けたくない」ということになる。大熊の人は「有屋には負けてもいい」「仲勝に負けてもいい」、だけど「浦上には負けられない」と、こうなるわけです。こういう、いい意味でのライバル意識が昔から強くて、これはいまでも若干あります。もちろん、当人は面白半分なわけで、本気で喧嘩するわけではないんですよ。ただ、上方（かみほう）地区の中にはそういう競争心があって、い

までも良きライバルという関係が続いているんじゃないかなと思います。ところで、その「大熊と浦上」ですが、唄の方はこんな感じです。

でくまとうらがんとすぎのはしかくて〜〜や〜〜よいよい、はし〜〜かくて〜  
うれがこげるときやかなとちゆみち

これは「大熊と浦上の境目にある橋が嵐で流されてしまったら、それは恋人にとっては大変だよ。お互いに愛しい人同士がもう会えなくなってしまうんだから」という意味なんですけどね。それから、6曲目は「でっしょう」。これは「手習」と書いて「でっしょう」と読みます。もともと有盛公が手習い、大和から来た鍋かなという女性が学問を教えたと言われております。島でも「憲徳なべ加那節」という唄がありますが、あのなべ加那とはおそらく別人ではないかなと思いますが。そして「油だらだら」ですね。それから、喜界島の喜界の「喜界湾泊まり」、「きゃーわんどまり」。「うらとみ」「西ぬ実久」「赤木名観音堂」、これはどこにでもある踊りで有名だと思いますが。あと「ちくてんぐわ」「いへぬ按司神」「ほーめらぶ」という唄があります。

浦上以外の集落でも聞いたことのある唄としては、よくあるのは、「今の踊り」これは一般的には「さんどまけまけ」として知られています。あと「しゅんかね」。これも島唄にもありますし、八月踊りでも有名な唄の一つとして残っています。あとは、「赤木名観音堂」ですね。それから、さっき歌った「大熊と浦上」。浦上ではこういう名前でも歌われているんですが、面白いことに、これが有屋に行くと、「有屋と仲勝」（ありやとなんがち）に変わります。たしか笠利方面にも似たような唄があったかと思えます。二つの集落を唄のタイトルにして、相手の集落の特色をお互いに貶し合ったりするというのが特徴の唄なのかなと思っております。

ちなみに、この十三の「いへぬ按司神」と十四の「ほーめらぶ」という曲は非常に難しい唄、踊りで、八月踊りが盛んである浦上ではあるのですけれども、この二曲は先ほどの組織の中の五十代の「五十代会」、それから「若返り会」というけっこう上の年齢の方たちじゃないと踊りが組み立てられないと言われております。ただ、ぼくはこの最後の「ほーめらぶ」という曲が大好きで、2年前に青年団長をさせていただいていたときに、「いや〜、青年団でもできるよ」と言って、皆に無理やり練習させて、なんとか「ヤーマワリ」（家回り）をできるようになりました。やっぱり、ある世代にしかできない歌や踊りというのはないと思うんですよ。ただ、もちろん、その味わいだったり、齢を重ねるごとに出て来る唄声の味だったり、その重みというのはもちろん若者には出せませんが、近づくことは絶対にできるとぼくは思っております。

それで、この八月踊りを踊る機会としては、これも非常に大ざっぱですが、年間行事としてはまず初めに正月ですね（図2）。浦上の場合、一月三日に合同集落の歳の祝をします。そのときに八月踊りが踊られたり、あるいは夏場になると町内会の「育成会」の夏祭りでも踊られたり、あとは奄美市協賛の夏祭りである「奄美祭り」で、名瀬市内の商店街の中心から屋仁川まで、いろんな集落の人たちが集まって踊る「八月踊り大会」があります。あと、一番大きいのが4番の「ムチモレ踊り」と5番の「敬老会並びに豊年相撲祭」ですね。これはずっと昔からいままで続いているんですが、右に二大行事と書いてあるように、この二つの行事は二千人近くいる浦上集落の行事の中でも、青年団の主催で行われる行事で、それに町内会が協力をするという行事です。

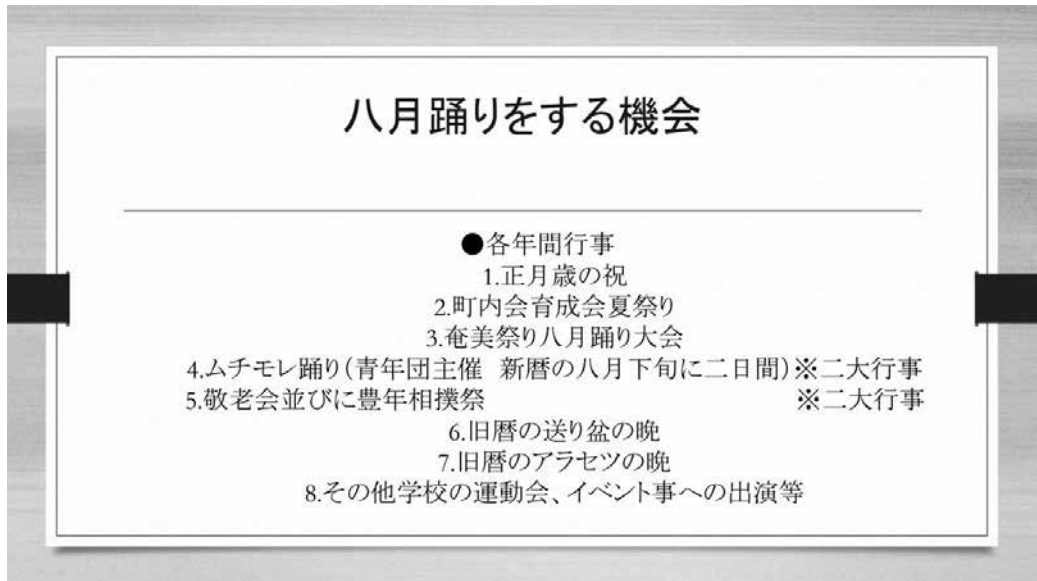


図2

「ムチモレ踊り」というのは、浦上では数十年間ずっと「節（せつ）踊り」という名前で踊られておりました。これは二年前に、ぼくが団長をやっていたときに、「いつからこんな名前になったんだろう」と思って、先輩方に「節踊りってどういう意味なんですか？」と聞いたところ、皆さんけっこうお分かりにならないようで。そんな風に呼ぶ集落はほかにないですよ。たとえば、大熊では「ヤーマワリ」という。ヤーマワリというのは、どこにでもある、家を一軒一軒踊り歩いていくものですが、浦上だけで節踊りと呼ぶ理由がよく分からなかったんですね。

アラセツ、シバサシ、ドンガの「三八月」ってありますよね。八月踊りの中に「シバサシや七日はやめとり」という歌詞があります。アラセツとシバサシの間は七日置いて、休んで、またシバサシ踊りを三日間踊るということで、これは笠利方面でもいまでもやっていると思いますが、そういう歌詞があるんですね。先輩方の答えは、「おそらくそのアラセツの『節』にちなんで節踊りになったんだろう」というすごく曖昧なものだったので、ぼくはそのとき団長だったので、「昔浦上ではたしか『カネモレ踊り』、『ムチモレ踊り』（餅もらい踊り）という風に呼ばれていたそうだから、あまり意味のない呼び名なら、もう原点に戻しましょう」と言って、いきなり「ムチモレ踊り」に変えちゃったんですね。平成27年のことです。それからは「ムチモレ踊り」という名前になっています。

もうひとつの「カネモレ踊り」の方ですけど、昔はどここの集落でも同じだったと思うんですが、集落が資金を花金として預かるんですね。その「金をもらう」がなまって「カネモレ踊り」と呼んでいたそうです。まあ、言葉はあんまりよくないですが。

ほかに八月踊りを踊るのは、敬老会の「豊年相撲祭」です。こちらで中入りとして踊られたり、あとは旧暦の送り盆の晩や同じく旧暦のアラセツの晩に踊ったりですね。また、地元の地域の小中学校の運動会のプログラムとして踊ったりもします。あとは、いろんなイベントのときにご依頼を受ければ踊るようにいまはなっています。

そのなかで、「八月踊り大会」と「ムチモレ踊り」の様子を、写真を通してざっと振り返っ

てみたいと思います。

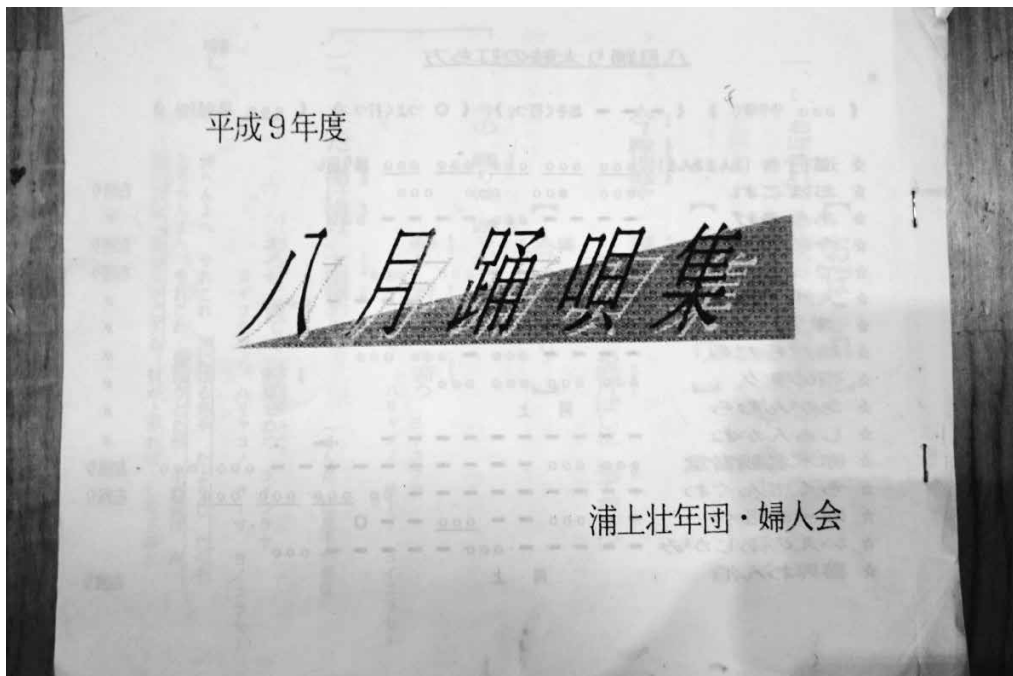


図3

さて、『八月踊唄集』と書いてあります(図3)。これが浦上の八月踊りの歌集です。もともと八月踊りというのは子供の頃から先輩たちの踊りの輪に入って、唄を聴いて、踊りを足慣れから覚えて、手の動きを覚えてと、そうやって自然に覚えていくものだったのですが、いまはなかなかそういうわけにもいかない。なによりも言葉が分からないんですね。それで、子供たちを育成するときに、島の方言を口伝えだけで教えるのは厳しいし限界がきているということで、文字に起こそうということになったそうです。この歌詞集には平成9年と書いてありますが、実際に歌詞集ができたのは平成元年頃だと聞いております。最近は大藪さんが立ち上げたあまみFMさんをはじめとして、あちこちからシマグチが聞かれるようになりましたけれども。

歌集をめくっていくと、最初のページに、「八月踊り太鼓の打ち方」と書いてあります(図4)。これ、面白いんですよ。ごらんのように、左に曲名が書いてあって、右に○が三つあって、線が何個か並んでいたりします。一番右側に右回り、左回り、右回りを書いてあるんですけれども、これは見ただけじゃさっぱりわかりませんよね。これは集落の当時の方々が、初めて八月踊りの太鼓を叩く人用に、太鼓の叩き方の楽譜みたいな感じで一生懸命に書いたそうです。ちなみに浦上は女性が太鼓を叩きます。

一番左上が、○が「やや早く」、左から二番目が「おそく打つ」。左から三番目の◎が「つよく打つ」。一番右が「早く打つ」。全部三連符で。「やや早く打つ」、「おそく打つ」、「早く打つ」、「つよく打つ」。ふつうは、こういうのはなんとなく感覚でやるじゃないですか。三拍子で「やや早く」だったら、パンパンパンと、こんな風に。強く打つときは、バンバンってこうやったり。こんな感じかなと試しながら練習するじゃないですか。

八月踊り太鼓の打ち方

( 000 やや早く ) ( - - - おそく打つ ) ( O つよく打つ ) ( 000 早く打つ )

☆ 道行き (あんまあんま)	000 000 000 000 000	繰り返し	
☆ おぼこれ	000 000 000 000		右回り
☆ あらさげ	- - - 000 - - - 000		〃
☆ 今の踊り	同上		左回り
☆ でっしょう	- - 000 - - 000 000		右回り
☆ 大熊と浦上	- - - - 000 - - - 000		〃
☆ 浦 富	- - - - - 000 000	同じ	〃
☆ 油だらだら	- - - - 000 - 000 000		〃
☆ 西の実久	000 000 000 000		〃
☆ あがんむら	同上		〃
☆ しゅんかね	- - - - - 10拍		〃
☆ 赤木名観音堂	000 000 - - - - - 000 000		左回り
☆ ちくてんぐわ	- - - - - 00 000 000 000 O		右回り
☆ ほーめらべ	- - 000 - - 000 - - O		
☆ いえのあじがみ	- - - - - 000 - - - 000		右回り
☆ 喜界わん泊	同上		

図 4

この歌詞集をつくったとき、当時制作に反対していた老人クラブの先輩方がこれを見て、「いや、そんなに早く叩かないよ。ここに書かれている『やや早く』とか『早く打つ』というのは、どういう意味なのかい？」と尋ねたという話もあって、逆にこういうふうに表示にすることでややこしくしてしまい、混乱を招くこともあったみたいですね。それまではずっと口伝えでしたから。でも、面白いですよ。確かにすごく分かり易いようで分かりにくいんですよ。そして今度は実践に移ったときに、先輩方が指導に入るんですよ。「どら」とこうやって後ろからちゃんと足を見ていて、太鼓を打つ人には太鼓の後ろからず〜っと聞いているんです。もう怖いぐらいですけどね。いや、優しい先輩方です。

どんどんめくっていくと、いろいろな歌詞が出て来るんですね (図 5)。男が歌う歌詞、女が歌う歌詞と分けて書いてあります。歌はぜんぶ掛け合いなんで、この歌詞集では男性がこう歌い、女性がこう返すと決めちゃっているんですが、実際はこの通りに歌うわけではないですよ。けれども、分かり易いように、こういうふうにご覧の歌詞がいっぱい並んで出てきます。

ここからは「奄美祭り」のときの八月踊り大会を、ちょっと振り返ってみたいと思います。毎年、浦上町内会の踊る場所は、商店街の指宿さんのセントラル楽器から交差点に出たところのちょうど真ん中なんです。それで、お隣には八月踊りでは島で一番有名と言われてる佐仁集落さんがいらっしやる。こちらのお隣には踊りが盛んな大笠利集落です。八月踊りが盛んな佐仁さんと大笠利に挟まれたら、浦上はもうちっちゃくなっちゃうんですよ。

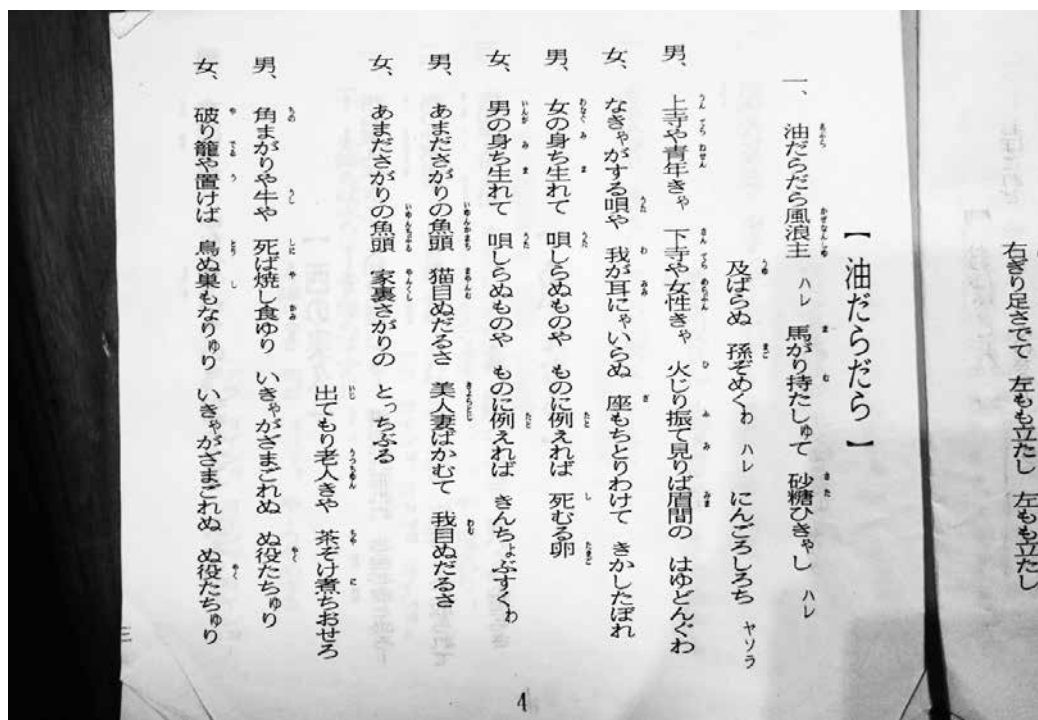


図5

というのは、みんなけっして上手ではないんです。もちろん先輩方は上手ですよ。ただ、ひとつだけ言えることは、ぼくたち浦上の老若男女は本当に踊りを愛していて、いつもそういう気持ちで踊りに参加しているということです。これは人口が増加してきたことと関係があると思いますね。やっぱり、子供も大人も一緒になって踊るということをまず考えるので、つねに育成ということを念頭においている。

子供たちは、おそらく自分が何をやっているか誰も理解していません。「なんだか踊りがあるらしい」、「お父さんお母さんが行くみたいだから、みんな行こうよ」という感じで来ていると思うんですね。そうやって意味も分からないで来ているんだけど、そういう子供たちが毎年こういう機会を持つと、やはり意外と覚えるものなんですよ、唄とか踊りをですね。自分は小さい頃は浦上にはいなかったんで、そういう経験はなかったのですが、この子供たちが大きくなったときに、毎年この時期になると、そのときの夏の思い出がよみがえると思うんですよ。「友達と一緒に、踊りながらごちそうをもらったよね」、「あのおじからもらったよね」とか、「あの六調太鼓を打つ人から太鼓を持たせてもらったよね」とか。そういう思い出が頭や体に沁みついていくはずなんですよ。島の人はいよいよ内地に出るので、この子供たちが青年団になって、高校を卒業するときです。ぼくたちは皆で送別会をするんですよ。そのあと帰って来るか、帰ってこないかは人それぞれですけどもね。それで、高校生をみんな集めて、「踊りの時期にはまた帰ってこいよ」「自分たちはいつでも待っているから、踊りだけは帰ってこい」と、そう言うんです。そうすると、九割方は帰ってきてくれるんですよ。仕事の休みを取ったり、学校の休みを利用したりして。そのときにまた皆と一緒に踊って、楽しめます。

ここで、ぼくたちがどんな雰囲気で踊っているかということ、YouTubeの動画で見たいと思います。奄美祭りの八月踊り大会の様子です。約3分間ですが、これは2009年なので、だいぶ前ですね。ちなみにこの踊りのときは、曲ごとに団体別に分けて踊りを組み立てるんです。たとえば、「この曲は「若返り会」がやるから、次の曲は「五十代会」が回せよ」とか「三曲目は壮年団が先頭に立って仕切れよ」とか。それで、最後の曲は青年団が先頭に立って仕切って、最後の「六調」は青年団を中心にみんなで盛り上がるというやり方です。ちょうどこの時期が学校の夏休みだったりしますんで、ついでに友達を誘ってもらって、初めて青年団活動に参加してもらって、そこから仲間づくりをやっていくように意識はしていますね。

これは「六調」ですけど、「六調」っぽくないですね。浦上の「六調」というのは、けっして難しいものではなくて、太鼓とカリズムも複雑ではなくて単純で、太鼓二人に対して三味線が二人。これはボレ太鼓・ボレ三味線といいますけど、こういうスタイルでやっています。他の人はひたすら踊って、まわりの観光客さんを巻き込んで「一緒に踊りましょう」と言ったりします。完全に自己満足の世界ですけれどね。(クィーンのwe will rock youが聞こえてくる)なんか聞いたことのあるメロディーですけど。これはサーモン&ガーリックさんがやっている「ワントゥーナヤクエティ」(私とあなたは太って!)。We will we will rock youをサーモン&ガーリックさんがマネしているんですけど、それを青年団が勝手にパクって「六調」に取り入れているんです。なんでもありですけど、もちろん怒られます。

ざっとこんな感じです。ここからはムチモレ踊りになっていくんですが、これは公民館の中ですね。あえて楽しく踊っているんです。楽しんでいるという雰囲気しか伝わってこないんですが、実はこれはこれでけっこう大変なんです。この八月に行われるムチモレという踊りは、本来は旧暦八月に踊ります。浦上の場合も昔はそうやっていたんですけど、いまは夏休みの最後の金土の二日間に合わせてやっています。旧暦に逆らってちょっと邪道かもしれませんが、できるだけ子供たちも参加できるようにということで、いまはその時期にやっています。

浦上は人口が1900人なので、41班もあるんですよ。その40班を各種団体ごとで踊り歩いて行けるように、主催の青年団が段取りをしていきます。1班から何班まではどの団体が躍る、「若返り会」が躍る、「青年団」が躍るという風に順番を決めていきます。これは段取りの準備をしているところですね(図6)。本番はだいたい8月の後半なんですが、こうして段取りを準備するのが6月の中旬くらい。もう夜な夜な公民館です。こういう準備をず〜としていって、資料作りから、踊りで必要な電燈づくりから全部です。町内会でみんなが集まるための資料を作っていきます。



図6



図7



## Revitalization of the August-dance in Uragami

資料を作ると今度は、こうして各種団体の役員さんを集めて、主催の青年団が先輩のみなさん方にまず提案して、それから意見をもらうんです（図7）。ここで承認をもらえないと、ムチモレ踊りはできないという仕組みなんです。

ここまでやらんでもいいのではないかと、ぼくは思うんですけども。もう上がるさいですよ。ね。「おまえら主催なんだから、しっかりやれ」と。ここで、せっかく人数分つくった資料が全部流れたりすることもあるんです。「ここは高齢者が躍るのはしんどいからお前らが行け」と、踊りの時刻を変えたりとかね。ああだこうだと言われながら、試行錯誤を繰り返して、ようやく本番のムチモレ踊りに結びついていきます。



図8



図9

これは最初のトネヤ（図8）。まあ、むかし祭りをしていた屋敷ですね。これが最初の踊りが踊られる場所なんですけれども、このトネヤでは、子供たちからお年寄りの「若返り会」まで、すべての団体が一緒に踊るんですね。ここが終わって2軒目からは、それぞれの団体がそれぞれの場所に分かれて踊り歩いていきます。で、家を回るときは新築さんは必ず回るようにしていきます。

これは「青年団」です（図9）。浴衣におこし（裾よけ）を女性は付けたり、ユニフォームみたいなTシャツを作って、家を練り歩いていきます。これはどこの集落も一緒だと思いますが、各家がムチモレ、ヤマワリのときには、おうちの方々が御馳走を用意してくださって、それを輪で囲んで踊り歩いていく。これは「六調」のときですかね。

これはみんなトラックに乗っています（図10）。なぜかといいますと、実は暗黙の了解なんですけれども、浦上はけっこう小さいとはいえ、集落を全部回るんですよ。弁当を持って、太鼓を持って、三味線も持って、「青年団」が一番遠いところを歩くんですけど、荷物隊だけはトラックに乗って行くんです。軽トラに荷物を全部積んで、先に先発隊として準備をして待っていて、家族さんたちに「今日はよろしくお願ひします」と挨拶をして、あとからぼくみたいな人間が歩いて付いていきます。これはその途中の様子ですね。



図 10



図 11

こういう写真からどういったことが伝わりますでしょうか。本当に、準備とか段取りとか、集落行事というのは大変なんです。もう、みんな仕事をしていますからね。仕事をして、仕事が終わって、夜は公民館に集まって、結婚したらこれがお厳しくなっていくんですね。家族を持つとやっぱりね。資料を作る準備で夜中までかかったり。いくら浦上がこういう活動が盛んだとはいえ、なんだかんだで青年団の人間はだんだん減ってきているんですね。そのなかで、少ない人数でも、やらなければいけないことは集落のために一致団結してやる。それは非常に大変なので、やっぱり終わった後の達成感というのは、日常では味わえないものがあるんですよ。

この写真では、女の子たちが料理を持ったりしています(図 11)。これは「六調」の合間で、家庭からいただいたおハナの料理ですね。それに対して、「ありがとう」ということで、天草、「六調」を踊っているところですよね(図 12)。「もらたもろた」、「めでためでた」、「よいやー」と言って、感謝の気持ちを表現するんですけども。



図 12



図 13

これは、いただいた寄付金、お金を「わきゃ浦上青年団の踊りあまりにもさかんなるがために、よいや」と言って、「誰々誰々何様から内金五千両」とかいナ金の読み上げをして、感謝の気持ちを表現しているところです(図 13)。いろんな集落でそれぞれのやり方があると思いますが。

そうすると、子供たちも意味は分かっていないけど、周囲が「よいやー」と言うものだから、一緒に「よいやー」と言うんですよ(図 14)。これがまた面白いんでしょうね。子供たちは10時までは保護者と一緒に家に帰すようにしています。そういう決まりのもとで、限ら

れた時間ですが一緒にやっています。



図 14



図 15

これは夜中の2時くらいですかね(図15)。だいたい一日に7軒から8軒の家を踊り歩くんです。だいたい夕方6時くらいにトネヤの踊りが始まって、終わるのがいまは1時と決まっているので、本当は1時までには終わらないといけないのですが、オーバーして2時です。昔は朝までやっていたんですがね。いま浦上の八月踊りは、浦上の人たちだけではなく、いろんなところからいらっやっています。そのなかで、地域の伝統行事に対する理解を求めはするんですけども、やっぱりなかなかうまくいかなくて、通報があつて警察さんがいらっやることもあるんですよ。そのへんの理解というのが、ほんとうに今後の課題で、昔からずっと脈々と受け継がれてきているこの伝統文化に対する理解をいただけない住民さんもいらっやる。そういう付き合いのなかで、自分たちもある程度折れないといけないところもある。でも、この写真からもなんとなく伝わってきますか。仕方なくやっているようには見えませんよね。いちおう楽しんでるんですよ。

それはもちろんお酒の力もあるとは思いますが、この八月踊りで20代の人間がこれだけ楽しんでるのはなぜかという、けっこうそれまでの苦勞のせいもあるんですよ。自分たちが遊びたくてしょうがないときもあるんですが、集落のために何時間も使って準備して、夜遅くまでシマのためにせつせとやっつて、ろくに練習する時間もなくて、踊りに臨みます。なので、一気に解放されるんですよ。「やっつと、自分たちの仕事が終わる」、「好きなように踊れる」という気持ちで発散している光景なのかなと思います。

そろそろ終わりますが、ぼくの勝手な主観ですけども、持論にしていることがあります。それは八月踊りはシマの特色を、地域の特色を生み出す、まさに地域に根付いた文化なのではないかということです。そして集団舞踊ということもあつて、やっぱり人と人とのつながりがないと、継承は困難である、と。そして言葉は難しくとも、踊る、そして唄を掛け合うことの面白さ、歌詞や唄の面白さを知ることによってさらに奥深さが分かり、ますます感動して楽しく面白くなる。また、古い形を押し付けるだけではなく、新しいものを生み出すことに対しても、それを受け入れる柔軟性と勇気を持つ。そして、自分の生まれ育った地域＝シマに誇りを持つ。そういうことだと、ぼくは思うんですよ。

それで今後の浦上の青年団にとっての課題なんですが、ではどうすれば八月踊りはずっと継承されていくのかということなんですけれども、これは答えはないと思うんです。浦上はいま見ていただいたように、若い人が頑張つてやっつているように見えますが、それほどでもないところもあつて、実際は人数も減つて来ているんですよ。やっぱりしんどいですから。そろそろ限界がきているという感じなので、町内会の集まりでも「もう青年団だけに主催を

まかせるのは厳しいんじゃないか」という意見も出たりはしているんです。ほんとうにいまはぎりぎりのところなのかもしれません。

ところで、さっき「六調」でみんなが飛び跳ねていましたよね。あれは実は浦上地区特有崩しというのですが、踊りの中で歌がかぶって入るんですよ。ちょっと「六調」っぽくない歌が。70代以上の先輩たちは、「あんな囃子は『六調』でするな」、「あれは『六調』じゃない」と怒るんです。「じゃあ、なんでああいう崩しを受けつがれているんですか」とその人たちに聞くと、「あれは自分たちが若い頃に、運動会の応援歌をそのまま「六調」に入れちゃったわけよ、そしたらみんなそれを真似するようになったわけよ」って言うんです。「んじゃ、先輩たちのせいじゃがね」って。

でもこれって面白いですよ。伝統とか文化っていうのは、やっぱりその時代に面白いものがあって、それを取り入れて、それがまた古き良きものとなっていく。そういう変革をとり入れながら新しくなっていく。これはたぶん八月踊りだけじゃなくて、島唄もそうやって続いていくのかな、と。これはさきほどから先輩方がおっしゃっていることでもあります、まさにその通りだと思うんです。

実は同じ浦上の八月踊りの歌でも、団体ごとに歌い方が違います。最初に「おぼこれ」という唄があるんですけども、この曲はぼくたち青年団が歌うときは、こんな風になります（歌う）。

これを70代の先輩たちが歌うと、どうなるかという（歌う）。と、とても同じ唄とは思えないほど、真似するのがものすごく難しいくらい、味があるかつこいいものになるんですよ。

ただ、そこはそこでかつこいいものとして敬意を払いつつ、自分たちは自分たちのなかで、新しいものをとり入れながらやっていくというのが、今後の課題なのではないかなと思っております。

先ほども言いましたが、八月踊りがどうやって継承されていくのかということについては、決まった答えはないと思います。それは自分たち浦上地区だけではなくて、皆さんと一緒に考えていく問題なのだろうと思っています。ご清聴ありがたまりょうた。